〔分科会・報告者一覧〕

【第一分科会：保存運動の現状と課題】

■司会　岩脇　彰（戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員）

1-1「山梨県の戦争遺跡と朝鮮人労働者の動員」
鮎沢　譲（山梨県戦争遺跡ネットワーク）

1-2「本土決戦準備期における湘南～二宮・大磯
・鎌倉の戦争遺跡の現状」 中田　均（浅川地下壕の保存をすすめる会）

1-3「海軍山陰航空隊大社基地跡の現況と今日までの保存活動」
西尾良一（平和を願い島根の戦跡を語る会）

【第二分科会：調査の方法と整備技術】

■司会　出原　恵三（戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表）

2-1「横須賀海軍航空隊茅ケ崎派遣隊のレーダー基地」
工藤洋三（空襲・戦災を記録する会全国連絡会議）

2-2「九州の遥拝遺構と熊本県の現況」
高谷和生（くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク）

2-3「松本市里山辺地下壕の入り口崩壊と修復および
地下壕内の地質構造の概略」　平川豊志（松本強制労働調査団）

【第三分科会：平和博物館と次世代への継承】

■司会　岩脇　彰（戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員）

3-1「東京裁判開廷７５周年を迎えて－東京裁判の〈遺産〉
を継承する－」　春日恒男（防衛省・市ヶ谷記念館を考える会）

3-2「〔PTSD の日本兵と家族の交流館〕が目指すこと」
黒井秋夫（東大和戦災変電所を保存する会）

分科会報告 I-I

「山梨県の戦争遺跡と朝鮮人労働者の動員」

山梨県戦争遺跡ネットワーク：鮎澤　譲

◆山梨県内、建設時に朝鮮人労働者が動員された主な戦争遺跡

A 日本軽金属の富士川水力発電所と導水路（身延町・南部町）

B 韮崎七里岩地下壕群（韮崎市）

C 御勅使河原飛行場（ロタコ）地下壕跡（南アルプス市）

D 東京陸軍糧秣本廠東山梨出張所跡（甲州市）

E 武蔵航空機吉田工場滑走路跡（富士吉田市）

◆山梨県在留朝鮮人数　　1935 年：2364 人　1939 年：12276 人　1945：約 9000 人

　地域社会に根付いていく層と、強制連行など戦時動員により連行された人々

A　日本軽金属による富士川水力発電工事への戦時動員　1937～45 年

日本軽金属は軍需産業へのアルミニウム供給を目的とした準国策会社

日軽金の自家用発電所建設は当時日本随一の大規模な工事

1937-39 年　富士川電力の波木井発電所工事

1939-42 年　日軽金の第一･第二発電所、導水路トンネル工事

1943-45 年　佐野川発電所・本栖発電所史研放水路工事

総延長 50 キロの９割が導水路トンネルに覆われている

工事は飛島組、西松組などが請け負い、9 千人の労働者が 470 もの飯場に分散して働いた

危険な工事：昼夜兼行の突貫工事　手抜きで拙速で危険な工事

高い逃走率　1940 年：28％　1942 年：41％　　争議：10 件弱　参加者 300 人弱

犠牲者の実態　ほぼ全員が朝鮮人　山梨県側のみで死者 38 人負傷者 4533 人〔警察文書〕

・1940 年５月　第一発電所水ノロトンネル落盤事故　7 人死亡

・1940 年３月　第二発電所十島トンネル洪水流入事故　10 余人死亡

・栄村：1939・40 年　5 回の事故で各 1 人死亡　　・下山村：1938 年の事故で 1 人死亡

・大河内村：1940 年の事故で 1 名死亡　〔『山梨日日新聞』記事〕

◆2016 年３月に南部町栄地区の地域調査の結果、戦時期の栄地区での朝鮮人死亡者の氏名等が明らかになった。朝鮮人と思われる死亡者 12 名（25～53 歳）のうちのほとんどが、水力発電導水路掘削工事の栄地区の工事場の掘削時の事故で死亡したと推測される。

また、生後 15 日から 5 歳の 11 名の乳幼児の多くが貧困状況の中で栄養失調等の要因で亡くなったと推測される。

◆日本軽金属（株）:『社史』にも朝鮮人労働者の記述ない　朝鮮人の動員・連行数、工事での犠牲者

数・氏名等を明らかにしていない、補償も全くしていない
会社の戦後発展する企業基盤は戦時下に築かれた
B　陸軍航空本部の韮崎七里岩地下壕の工事では、1945 年３月から千人前後の朝鮮人労働者が過酷な掘削工事に動員された。
本土空襲が激化した 1945 年３月、軍部は、航空機工場の分散秘匿、地下工場化を図ることを計画した。隼戦闘機月産 150 機を目標にした「韮崎地下工場隧道」工事は 1945 年４月から敗戦時まで続いた。現在確認されるのは、七里岩大地に沿って祖母石地下壕、祖母石団地裏地下壕である。
1945 年に２千人以上の朝鮮人が韮崎周辺に在住していたが、その多くが七里岩地下壕工事に従事した朝鮮人とその家族であった。一ツ谷地区ではバラックの飯場に約 200 名の朝鮮人労働者が居住し、祖母石地区では民家の作業所や蚕室に数百陣の朝鮮人が居住した。韮崎国民学校に朝鮮人児童数十人が 1945 年になって転入してきた記録がある。1945 年 8 月 15 日、朝鮮人たちはアリランを歌い踊り、植民地からの解放の喜びをあらわした。
C　中巨摩郡飯野村（現南アルプス市）の陸軍御勅使河原飛行場の、1944 秋に始まった「ロタコ」工事と呼ばれた滑走路・掩体壕工事では、飛行機や物資を秘匿するための地下壕の掘削工事が朝鮮人労働者によって昼夜兼行で行われた。ロタコは、アジア太平洋戦争末期、甲府盆地の西部に陸軍が主導して構築が計画された秘匿飛行場「御勅使河原飛行場」等の施設群。「ロタコ」は「第二立川航空廠」の暗号名だと言われている。建設工事では、滑走路、掩体壕、誘導路，兵舎、横穴壕などの施設がつくられ、軍人、軍属とともに、毎日約 3000 人あまりの住民が動員され、旧制中学生徒、近くの国民学校生徒までも動員された。多くの掩体壕がつくられたが、戦後、取り壊され、現在、掩体壕の３基の基礎部分の跡が残っている。
近くの山裾に約２ｋｍにわたって 30 以上の数の地下壕が建設された。地下壕群は物資の秘匿、または飛行機の工場を目的として構築された。横穴は、約 50m感覚で壕の入り口は８～10m、高さは３～４ｍあり、一部は内部で直交する坑道でつながっていた。これらの地下壕群は、戦後、崩落したり埋め戻されたりして、現在は壕の天井が陥没してできた窪みに痕跡を残している。地下壕群の工事は、1944 年秋に始まり、崩落の危険にさらされ、発破などの危険な工事で、朝鮮人労働者が、交代制で昼夜を問わず従事した。落盤による犠牲者も出た。
D　東山梨郡松里村（現甲州市）では東京深川から疎開することになった軍隊用食糧製造工場の 1944 年に始まった「陸軍糧秣本廠東山梨出張所」建設工事に朝鮮人労働者約二百人が動員された。1945 年 1 月から防空用土塁が築かれ、その内側に、主食工場、砂糖工場、でんぷん工場、冷却工場、汽罐室などが、8 月の終戦までに 10 か所ほど建設された。
作業に従事したのは、地元住民の勤労奉仕、学徒勤労動員の旧制日川中学の 1 年生徒約 300 名、朝鮮人労働者約 200 名であった。現在、土塁の一部の跡、ぶどう畑の中に貯水槽跡のコンクリート塊、機械や薬品等を爆撃から守るための横穴防空壕が残されている。

本土決戦準備期における
湘南～二宮・大磯・鎌倉の戦争遺跡の現状

中田　均（浅川地下壕の保存をすすめる会）

〇３つの調査報告書

・『二宮の洞窟陣地調査記録　ひとしずく第５号』2012 （戦時下の二宮を記録する会）

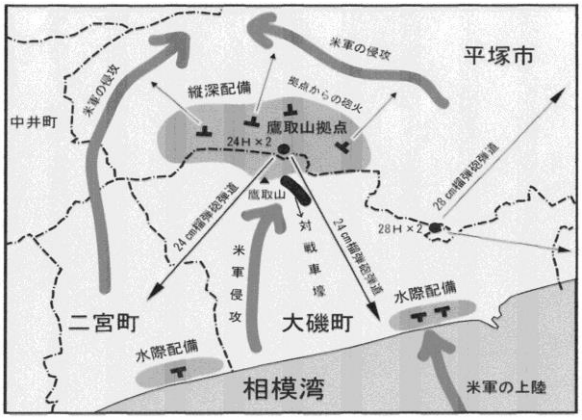
・「米軍のコロネット作戦に対する第５３軍の本土防衛～大磯地区の本土決戦準備態勢～」（『平塚市博物館研究報告 自然と文化３４号』2011　市原 誠）

・『鎌倉・太平洋戦争の痕跡』2004　（鎌倉市中央図書館近代史資料収集室・ＣＰＣの会）

〇報告主旨

米軍の上陸に際して本土決戦の舞台となったであろう相模湾沿岸の湘南地方では、いま戦争遺跡として何が残っているのでしょうか。宅地造成による地域の変貌と風化が進み、それでも谷戸の奥に残る多くの陣地跡。

３つの調査報告書は、地元の協力を得て、記憶を頼りに現地を歩き、調査・実測・聞き取りを行い記録し市民の力で作成された報告書です。本土決戦は何のために準備されたのか？



（図　市原 誠）

戦争遺跡に語らせたい。

〇戦争遺跡の現状

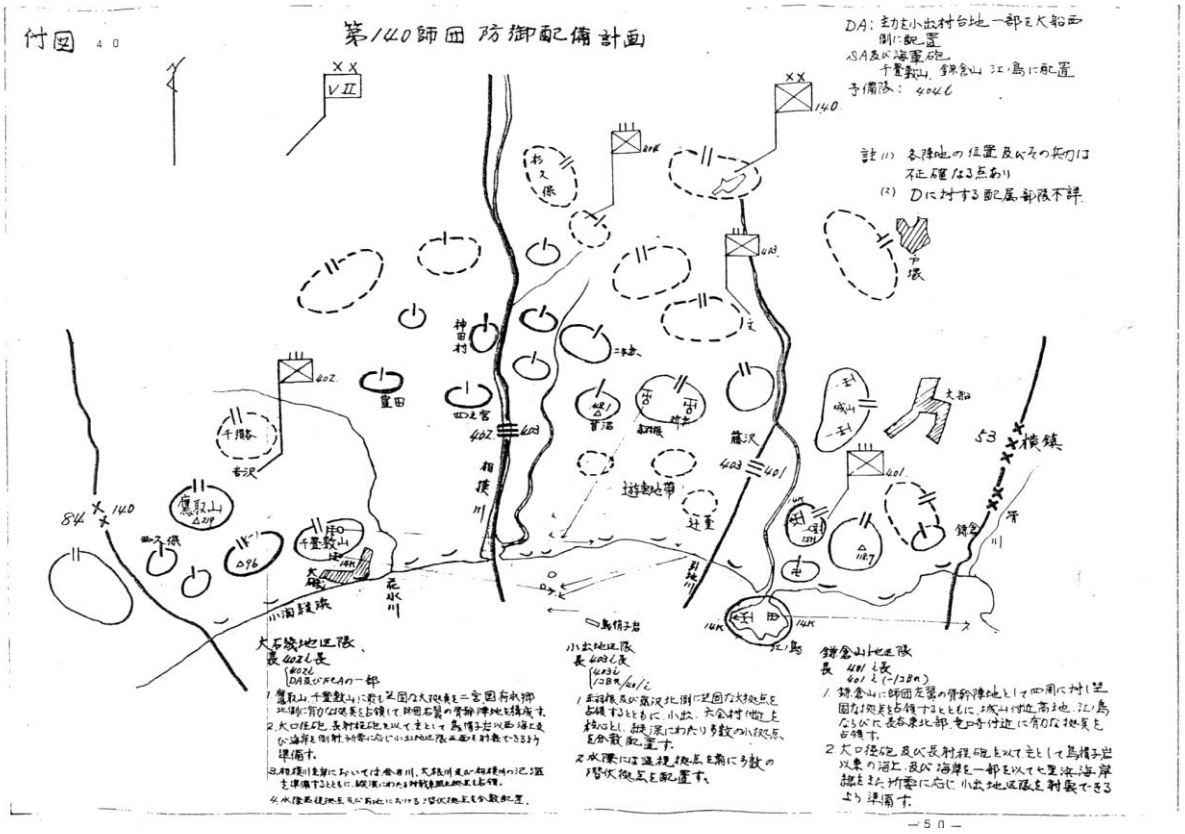
二宮・大磯・鎌倉　スライド・・・・

資料１　鎌倉の陣地構築に従事した一兵士の回顧録　　仲　清（平成１３年１２月５日）

遊行寺では、毎朝部隊の点呼が行われ、体操の後、屈強な兵士による、切込みの模範演技などが実施された。身のこなしの素早しこそうな軽装の下士官が、背中に抜き身の軍刀を隠し持ち、境内の隅から本堂脇にしつらえた銃剣で刺突練習用の人型に、物影などを利用しながら隠密に近づき、人型を相手に切り結んだあと、最後に止めの一突きをいれるのである。私どもの感想としては「あんなに巧くいくものかなあ」というのが実感であった。分隊は数日後、新しい陣地構築のため遊行寺から南に道路を渡り、現在の大鋸(だいぎり)と呼ばれるあたりの斜面に繋止(なわばりをして、ツルハシを打ち込み、作業を始めたところで掘削中止の命令を受領し、腰越の本隊に復帰した。６月末、沖縄が陥落、アメリカの本土侵攻の脅

威がより早くなって水際陣地を至急に強化する必要に迫られたためであろうか。防衛軍は武器、弾薬不足の中で、戦備状況を準戦争状態（乙戦備）から戦争状態の甲戦備に引き上げ戦闘準備に狂奔することになる。このため、足手纏いになりそうな兵隊は、帰郷させられた。私の分隊では、妻川二等兵が昔の盲腸手術の予後が悪かったとかで兵役免除となり、嬉しさを堪えて除隊していった。中村隊では、外に、３名が召集解除となった。この頃になって、やっと歩兵砲中隊の主戦兵器である３７mm速射砲が、たった一門支給になり、公会堂の庭先に据えられた。元来は車輪付きなのだろうが、木枠の中にぶらさがっていて奇妙な形であった。この九四式３７mm 対戦車砲は、敵の戦車を撃つために開発されたのであるが、既に時代遅れの代物で、二階建てといわれる大型のアメリカ M４戦車には歯が立たず、正面から撃っても弾は跳ね返ってしまうお粗末さで、専ら敵の上陸用舟艇か人員の狙撃が目標であった。しかし、それも一発撃てば、物量豊富な敵から数十倍のお返しがあり、たちどころに沈黙せざるを得ない実情であった。従って、攻撃方法の主体は、爆薬を抱えて戦車に体当たりする肉弾攻撃に頼るほかなく、公会堂前や校庭の広場に、ベニヤ板を戦車の大きさに切り抜いて立て、これに向って爆薬に見立てた砂袋などを抱いてぶっつかる訓練が、繰り返し行われていた。傑作なのは、リヤカーに戦車の形をしたベニヤ板を括りつけ兵隊が引き、これに体当たりする訓練で、とても正気の沙汰とも思えずマンガチックでさえあった。しかし、兵隊は真剣そのものであった。　『鎌倉・太平洋戦争の痕跡』

資料２　「第１４０師団防御配備計画」（自衛隊 施設学校教育部戦史教官室



島根県出雲市斐川町周辺に所在する

海軍 山陰航空隊 大社基地跡 の現状今日までの保存活動

平和を願い島根の戦跡を語る会　　西尾良一

1 海軍　山陰航空隊　大社基地の変遷

19 年夏

美保空より下見

20 年 3 月

美保空指令より周辺６ヶ村に新川廃川地に飛行場設置の命

第 338 設営隊と美保航空 36 分隊の飛行場建設開始

20 年 6 月

滑走路竣工

20 年 7 月

第 762 海軍航空隊本部大社に進出

空襲を受ける

2　基地の規模と配置

①　滑走路 1700×120 ㍍　内 1500×60 ㍍コンクリト舗装　・　②　誘導路

②　隧道燃料庫 6（延べ 230m）・同魚雷庫 7 坑（延 211m）・同爆弾庫 3 坑（延 90m）

③　本部兼受信壕　⑤送信壕　　⑥　防空砲台

3, 残存する主要遺構　と　大社の特色

2ー①　舗装部分は半壊以下で現存する。過走帯は消滅、着陸帯は北全壊、南 1/2 は畑地で残る。2-②　幅 15mでは残らず、2/3 は道路で軌道残る。2-③燃料庫・消滅 魚雷・爆弾　数穴消滅、概ね良好で現存　2-④　防水防湿壕の様相を残す　2-⑤　斜坑を有した未完成壕　⑥　砲廓.弾薬庫消滅

4　研究と保存運動の変遷

陰山慶一 1996　『いま蘇る山陰航空隊「大社基地」』

槇原吉則・足立正 1998　『川の中の飛行場』

池橋達夫 2001　「斐川の海軍航空基地」『島根史学会会報 No.38』

陳情「新川飛行場跡を考える会」代表　金森熙隆・陰山慶一

2002/08/12 の日付で　斐川町長あてに　保存要望を　提出

2007　山本淳一・足立正が中心に陰山慶一を代表に「平和を願い島根の戦跡を語る会」

5　現在の運動の状況

2021.2 月

島根史学会・戦後史会議・松江で見学会　　この時、島根考古学会オブ参加

3 月　前項 3 者で県・市に要望書提出・リーフレット刊行

横須賀海軍航空隊茅ヶ崎派遣隊のレーダー基地

工藤 洋三

1. はじめに 宅地開発などにともなって旧日本軍のレーダーの遺構が見つかることがある．発掘された遺構は，戦争遺跡としての重要性が認識されないまま破壊されることが多いので，レーダー施設に関する基礎的知識を共有したうえで，具体的な対処方針を決定すべきだと考える．旧日本軍のレーダー技術については，欧米諸国に対して大きな遅れがあったことが指摘されることが多いが，実際のところ戦争末期にどこまで開発が進んでいたのか，どの程度の実戦配備がなされていたのかを知ることは重要だと考えられる．

現存するレーダー遺構は多くないが，戦争直後，まだ関連施設が多く残っていた時期に，米国の戦略爆撃調査団が来日して調査した結果が残されている．一部はまとまった形で報告があるが，多くは基礎資料群の中に分散して収録されている．本稿では，こうした資料の中から特に戦争末期におけるレーダー開発と関連した写真を紹介し，その到達点について考察する．

2. 横須賀海軍航空隊茅ヶ崎派遣隊 略爆撃調査団は，資料を分類する際，地域ごとに英数字からなる記号を使用した．関東地方の西部は先頭の文字が J で，通常 J の後ろにxが続き，その後に数字が来る．Jx-27 という分類があり，それは「平塚の東にあるレーダー集中域」(radar concent-ration)と記されている[1]．

エリアコード Jx-27 に関しては，調査団によるスケッチ(図-1)が残されている[2]．図-2 に示すのは，第 2 海軍航空廠の引渡目録に収められている横須賀海軍航空隊茅ヶ崎派遣隊の位置図と隊内の配置図[3]であるが，図の下部中央に位置する「指揮所」が，図-1 の CP(指揮所：Command Post) で，レーダーの位置もよく対応していて，Jx-27 は茅ヶ崎派遣隊だとわかる．図-1 に添えられた説明には以下のように記されている．

> No.1 と No.2 は長さ 14 フィート(約 4.2m)のスクリーンを持つ同じ型のレーダーで，No.3 はアッツ型である．No.4 は Jx-26[須賀砲台]の No.1 及び No.3 と同じ型である．No.5 はドイツ型で直径 24 フィート 4 インチ(約 7m)ある．No.6 は Jx-26 の No.5 と同じタイプである

アッツ型(Attu type)とは，日本海軍の早期警戒用レーダー1 号 1 型改 2(略称 112 号)のことである．図-3 は，1946 年 2 月 16 日に撮影された航空写真の上に図-2 で示された建物配置を書き込んだものである．

調査団が茅ヶ崎派遣隊の基地で撮影した写真が残されている．これらの写真の中に，日本海軍の味方機誘導用の浜 62 号レーダーや中距離誘導用・邀撃用のレーダー浜 61 号が含まれている(発表同日に示す)．浜 62 号は，1944 年末に試作が完了し 1945 年 6 月に実験が終了して兵器に採用された．浜 61 号は，ドイツのウルツブルグレーダーの設計図と部品をもとに日本海軍が試作し 1945 年 4 月に兵器として採用され，戦争最末期に大量生産する計画が進んでいた．

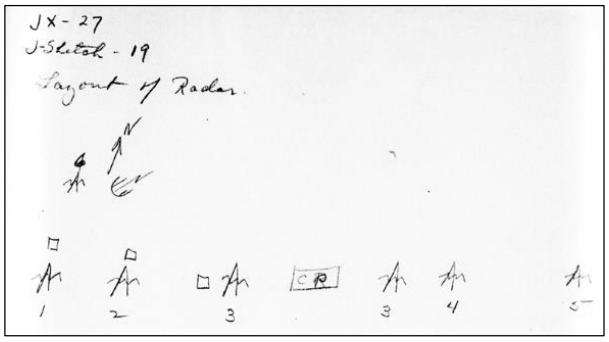


図-1 調査団が残したJx-27のスケッチ[7]

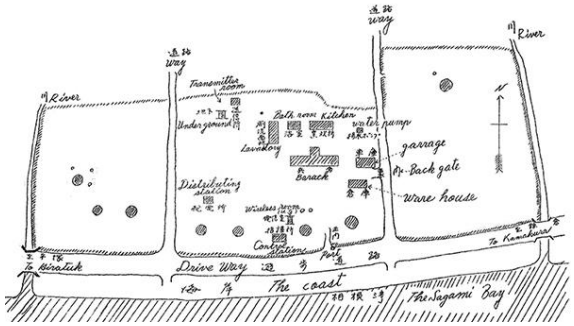


図-2 横須賀海軍航空隊茅ヶ崎派遣隊の配置

図-3 横須賀海軍航空隊茅ヶ崎派遣隊の建物配置 背景の写真は1946年2月16日撮影(米軍

3. 茅ヶ崎派遣隊の電探誘導 茅ヶ崎派遣隊の作戦の一端を示す資料が横須賀海軍航空隊の戦闘詳報[4]に残されている. 1945 年 4 月の戦闘詳報で, 夜間の戦闘において味方機と敵機を識別し, レーダーによって味方機を敵機の位置に導く海軍と陸軍協同の電探誘導法だった. 昼間に比べて目視の精度がはるかに落ちる夜間の戦闘では, 味方機を敵機の場所に誘導するとともに, 地上の防空砲台が味方機を撃ち落とさないよう, 味方機と敵機を区別することが重要だった. 図-4 に戦闘詳報に記載された電探誘導法について示した. 図には, 以下のような説明が付けられている.

113 号電探にて敵を測定し味方誘導機(たち 13 号及たき 15 号)にて味方を測定し空戦誘導盤にて飛行機を誘導す(敵高度は状況判断を主とし一部 61 号電探を使用せり)

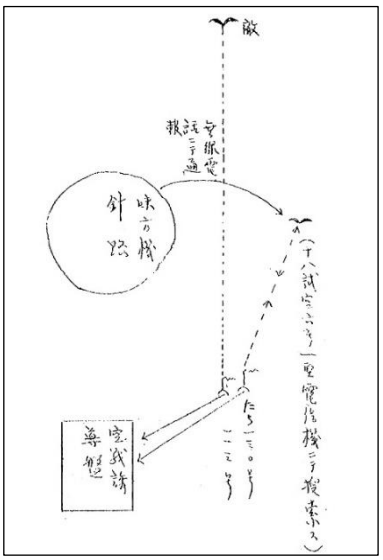


図-4 海軍の電探誘導法[4]

まず, 海軍の早期警戒用のレーダーを使って, 遠方の敵機をとらえた敵機が近づくと, 陸軍のタチ 13 号が. 電波を発信し, タキ 15 号を装備している上空の味方機(月光)がタチ 13 号から電波を受け取ると, その電波と異なる周波数で地上に電波を返し, これで味方機であることを知らせた. つまり, 敵味方識別のうち味方機識別を陸軍が担当した. 敵機の高度, 位置, 進行方向は海軍の 113 号レーダーで測定した. 図-1 の説明でアッツ型とされているレーダーは, 形状がほぼ等しい 113 号だったと考えられる. 測定結果を無線で射撃用レーダーに伝え, このレーダーが未来の位置を計算して地上から高角砲で射撃する計画だった.

一方, 海軍第 2 技術廠電波兵器部の「研究項目」には, 電波兵器研究の進行状況がまとめられている[5]. 味方誘導用レーダー浜 62 号が 6 月に完成し, 浜 62 号の応答機(transponder)である航空機搭載のレーダーM-13 の試作が 5 月に完成しているので, 戦争最末期には, 陸軍のタチ 13 号-タキ 15 号に代わって浜 62 号-M13 による味方識別方法が完成して, 陸軍から独立したシステムが出来上がっていた可能性が高い.

1945 年 7 月 16 日から 17 日にかけての平塚市街地を目標にした夜間市街地空襲では着弾地が大きく外れて被害が茅ヶ崎にも及び, 浜 61 号レーダーも損害を受けた[6].

4. おわりに 以上述べてきたように, 戦争末期にはレーダーの必要性が十分に認識され, 技術開発の速度も上がり, 最末期には欧米のレーダーと比較しても遜色ないものが開発されていたと考えられる. ただ, レーダー担当者の養成やレーダー妨害に対する対策など, 全体を一つのシステムとして運用する体制は間に合わなかった可能性が高い.

本稿を執筆するに当たり, 平塚の空襲と戦災を記録する会の藤野敬子さんには, 平塚や茅ヶ崎の戦災に関する資料収集でお世話になった. また, 日本軍のレーダーに関する情報提供などを久保晋作氏にお願いした記して謝意を表します.

【参考文献】 1) https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8822362, p.86.

2)https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8822421, p. 16.

3)第二海軍航空廠, 引渡目録(茅ヶ崎), (JACAR Ref. C08011314700), p. 4.

4)横須賀海軍航空隊戦闘詳報, 1945 年 4 月 1 日～4 月 30 日(夜間邀撃戦), (JACAR Ref. C13120488400), p.12.

5)第 2 海軍技術廠電波兵器部, 研究項目(JACAR Ref.C08011008700), p. 8.

6)研究実験の状況 JACAR Ref. C08011009000,, pp.7-8.

第２分科会報告「九州の遥拝遺構と熊本県の現況」

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク　髙谷　和生

１　遥拝（ようはい）

①大島北側の沖津宮遥拝所（宗像市）

「遥拝」とは、遠く隔たった所から、神仏などを遙かにに拝む所作である。特に、戦前からアジア・太平洋戦争期間中を通し、日本内地や外地、所謂大東亜共栄圏内において、宮城（皇居）に向かって敬礼、拝礼する行為を、「宮城・皇居遥拝」と称していた。宮城遥拝は、日本国民が天皇への忠誠を誓う行為の一つとされ、奉安殿内の御真影への敬礼とともに、皇室への崇拝を促し、戦意高揚を図る目的で盛んに行われていた。現在でも伊勢神宮等の神仏のみならず、自然物である冨士山等の「遥拝」も行われている。福岡県宗像市大島北端側には、はるか 50km 離れた沖合の世界遺産「沖ノ島（宗像大社沖津宮）」を遥拝する「沖津宮遥拝所・社殿」が設置されている。

２　熊本市北区旧熊本陸軍幼年学校の遥施遺構

②熊本幼年学校「右脇門」オルソ図
③右脇門・擁壁の現況

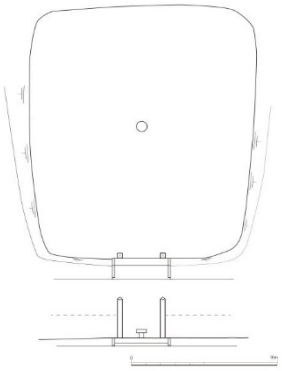
□陸軍幼年学校　1896 年（明治 29 年）５月、明治政府は国軍に優秀な将校を育成する必要上、幼年時代より特別教育を行うため、地方幼年学校を東京・仙台・名古屋・大阪・広島・熊本に設立した。熊本陸軍幼年学校は、1897 年９月熊本城内棒庵坂上（現監物台樹木園）に開校した。入校者は 13 歳から 16 歳未満で、全寮制による生活指導を行い、軍人精神（責任感、判断力、統帥指揮力）の鍛錬が目標にあげられ、少人数の家塾的教育が行われた。城内時代で 29 期まで、清水台時代で 43 期から 49 期までの計 2,828 人を輩出した。本学の出身者として著名な軍人は、梅津美治朗（第１期）、牛島満（第５期）、牟田口廉也（第７期）、武藤章（第 10 期）、長勇（第 13 期）等である。

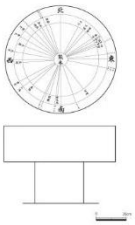
□清水台での熊本陸軍幼年学校

移転された通称「正門」は「脇門」　熊本市北区清水町の陸上自衛隊北熊本駐屯地内旧防衛館の園庭には、通称「正門・コンクリート製擁壁」が移転されている。また、門には「熊本陸軍幼年学校」と刻まれた大理石製標札が埋め込まれている。ただ当時写真２枚と実測図を対比検証したところ、これまで通称正門とされる門は、旧「脇門」であると判断された。脇門は全高 2.35m、断面方形 65cm である。

遙拝所と三方位盤　学校敷地の東側、東門に近接し凝灰岩製全高 2.95m門柱二本を有する「遙拝所」と呼ばれる区画が現存している。学校生徒が宮城を拝礼し、軍人勅諭を拝読する場所であり、中央には遥拝の要となる径 73cm 大理石製「三方位盤」が残されている。中心円（第一周）に熊本を、第二周には方位直線、第三周には北から右回りで山口・旭川・廣島・仙臺・京都・大分・大阪・東京・高知・宮崎・鹿児島・那覇・長崎・大連等の主要地名が、最外周である

第四周には四方位のほかダッチハーバー・シンガポール・ハルピン等の当時の外地や主要地名が刻字されている。ただ、伊勢神宮は刻字されていない。また、当地には学校時代の戦争遺構として東門、雄健神社、天覧台等も現存している。





④熊本幼年学校「遥拝所」敷地測量図
⑤遥拝所門・敷地の全景
⑥三方位盤の表面
⑦三方位盤オルソ図
⑧三方位盤実測図

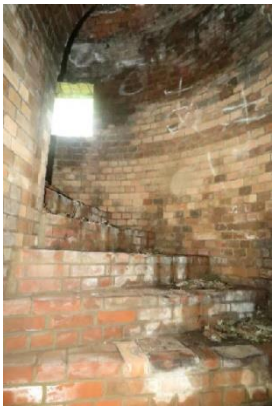
3　福岡県久留米市の陸軍歩兵聯隊の遥拝台遺構

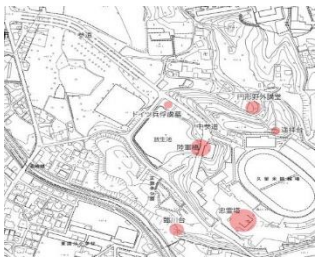
□陸軍墓地の全容　久留米市野中町の陸軍墓地は、昭和 14（1939）年 7 月に着手し、2 年 9 か月の歳月と経費 25 万円、延 11 万 2 千人の勤労奉仕によって同 17 年 4 月 10 日に竣工式及び鎮霊式が行われた。敷地は約 71,000 ㎡あり、忠霊塔、遥拝台、野外講堂、陸軍橋、放生池、臨川台、参道などの各遺構が残り、現在は大半が久留米競輪場の敷地となっている。この墓地建設は陸軍が主導し、久留米連隊区司令部の所轄範囲である久留米市をはじめ、筑後二市六郡及び佐賀県佐賀市、小城郡など広域の市町村が、資金や労働力を提供し建設に深く関わった。

□遥拝台　赤煉瓦造（ドイツ積みを基本とし一部イギリス積み）で裾広がりの円柱状をなし、高さ 4.8m、底部径 6.0m、屋上径 5.8m。外面の曲線が美しく、内部の螺旋階段を登ると屋上中央に遥拝塔が設置されている。西面した方形の花崗岩標柱に「宮城遥拝（側面には皇紀二百六十年）」のてん書字体で刻まれており、この場所から東方（皇居）に向け遥拝したとされ。

4　熊本県の現状

文化財への指定登録等の状況。菊池飛行場ミュージアム・荒尾二造平和資料館の現状を紹介。「山の中の海軍の町にしき　ひみつ基地ミュージアム」は一般社団法人錦まち観光協会が運営し、九三式中間練習機実物大模型機を新たに展示。県内戦争遺跡等を網羅した『くまもとの戦争遺産　～戦後 75 年平和を祈って』が２０２０年に刊行。





⑨遥拝台全景
⑩遥拝台内部らせん階段
⑪標柱「宮城遥拝」
⑫陸軍墓地配置図

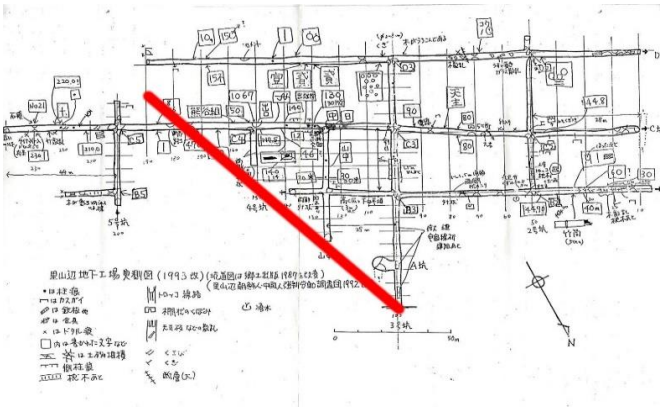
分科会報告 2-3

松本市里山辺地下壕の入り口崩壊と修復および地下壕内の地質構造の概略

松本強制労働調査団　平川豊志

昨年の７月の大雨により里山辺地下壕の入り口の上部が崩壊し、大きな岩が落下、入口の扉に激突、入り口をふさいだ。幸い崩壊したと思われる８月より後に近づいて確認したため、人的被害はなかったが、以降９月に崩壊状況の詳細の確認、11 月に再度確認、２月に修復の下見、３月に信大大塚氏との調査、６月に第一回目の修復・７月に大々的な修復と続き、８か月の間、ガイドができない事態となっている。（コロナ禍による案内中止も含む）崩壊状況は以下の写真の通り。

８月・12 月・３月の３回は崩壊していると思われる。もともとこの入り口は地下壕内の最大の断層が通っており、樹木の根が深く入り込み、ブロック状に風化も進んでいた。それが長雨により、崩壊したと考えられる。以前より注意はしていたが、やや侮っていたことが裏目に出た。

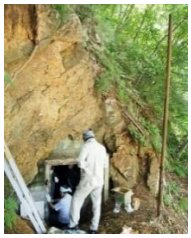


大きな岩が崩壊したことで、入口が壊され、今まで通っていた、通路も狭められた。崩壊の土砂と共に落ち葉の堆積がひどく、横が崖ということもあり、非常に危険な状態となっていた。

修復では入口の腐朽した枠の補強、入口に落ちてきていた岩塊の破壊と片付け。入り口前の土砂と落ち葉の片づけ。腐っていた、ロープの張替え、崩れていた登り口の補強が主な作業で入口の扉も作り替えた。もともとこの入り口は信州大学文理学部物理学教室の宇宙線観測所として作られたもので、枠の木も腐朽していた。地下壕の入り口は写真のように補強されているのが普通。こちらはズリの廃土口のため補強がなかった可能性がある。

（上松発電所）

（修復作業の様子）



今回地下壕内部の崩壊は見られなかったが、再度地質構造の見直しを行った。この地域に分布する地層は新生代新第三紀の時代のもので、主に、砂岩と頁岩（泥岩）の互層からなっている。下には石英閃緑岩の活動があるが、地下壕には露出していない。今回地層の境界（＝層理面）と今まで思われていた面のかなりが断層面だということや、圧縮の力による逆断層が見られ、節理も多く、複雑な構造をしており、崩れやすくなっていることが確認された。下は断層の写真です。

断層粘土（入口に続く大きな断層）　逆断層　　大きな断層面白い筋あり　断層の隙間

節理の写真

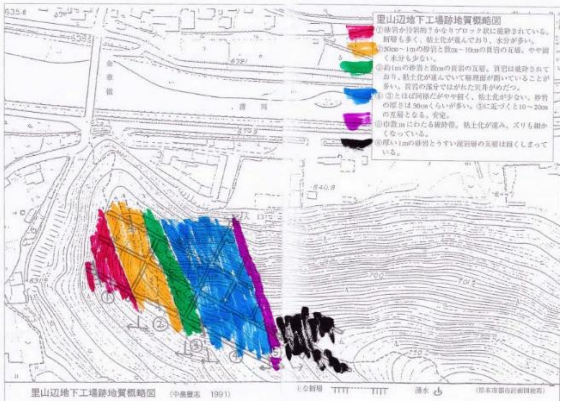
右は細かな節理群

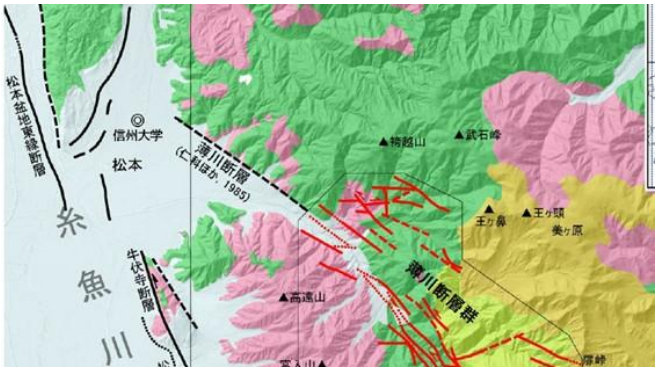
ロッド穴の周辺に特に多い節理

地質概略図

※引用「長野県松本市入山辺地域に発達する薄川断層群」

信州大学環境科学年報　39号(2017) 小山俊滉，大塚 勉





分科会報告「東京裁判開廷 75 周年を迎えて―東京裁判の＜遺産＞を継承する　―」

防衛省・市ケ谷記念館を考える会:春日恒男

１．東京裁判の＜遺産＞

デイヴィッド・コーエンと戸谷由麻は、その共著『東京裁判「神話」の解体』（ちくま新書、2018 年）で、日本政府や東京都の主導による「国際ニュルンベルク・東京原則アカデミー」の設立を提言している。この「国際ニュルンベルク・東京原則アカデミー」とは、ニュルンベルク裁判と東京裁判の遺産を継承し、国際刑事裁判における、その意義を世界に発信する組織である。彼らは三つの設立理由をあげる。第一に、近年の国際社会における東京裁判の評価の著しい変化だ。現在、東京裁判は、ドイツのニュルンベルク裁判と並んで「国際刑事裁判所史上の基盤となる出来事だったという理解が一般化して」いる。それは「ジェノサイド罪、戦争犯罪、人道に対する罪、そのほか大規模な人権違反に対する免責をなくすための国際刑事裁判、というメカニズムが、ますます世界的に重要な役割を果たすようになってきた」からであり、「とくにニュルンベルク・東京両裁判は、国際犯罪に対する個人責任の原則を認め適用した歴史的先例として評価され」、「これらを先例として、およそ五十年後に旧ユーゴ国際刑事裁判所（ICTY）とルワンダ国際刑事裁判所（ICTR）が設置」されたからである。とりわけ、その中心原則である「個人責任の原則」は 1946 年の国連総会決議により「国際法の中の中核たる原則」となり、1950 年、国連の国際法委員会作成の「ニュルンベルク諸原則」の一環として定式化された。以来、これは「国際刑法分野における基本原則」となり、オランダのハーグに常設の「国際刑事裁判所」に適用される「国際刑事裁判所に関するローマ規定」（以下、ローマ規定）にもこの原則が鎮座しているからである。第二に、その国際刑事裁判で果たしている日本の重要な役割だ。日本は、2007 年のローマ規定加入以来、「ニュルンベルク諸原則を実践するため、新世代の国際刑事裁判所を支援する所要な役割を果たして」いる。日本は、1993 年の旧ユーゴ国際刑事裁判所設置を支持。その後も旧ユーゴ、ルワンダの国際刑事裁判を支援し、2006 年のカンボジア特別法廷では、その「最大援助国」となった。つまり、現在、日本は「今日における国際社会の現場で東京裁判の遺産の擁護者、またその旗手たる役割を担っている」のである。

第三に、近年のドイツの変化と動きだ。ドイツも日本と同様、戦後は長らくニュルンベルク裁判に対して「勝者の裁き」という評価があった。しかし、近年、その評価を乗り越え、その遺産を積極的に継承する方向に転じている。2014 年、ドイツ政府、バイエルン州、ニュルンベルク市は「国際ニュルンベルク原則アカデミー」を設立し、その公式の場所を旧ニュルンベルク裁判法廷に定めた。そして、現在、「国際ニュルンベルク原則アカデミー」は、1950 年に定式化された「ニュルンベルク諸原則」、すなわち、「平和に対する罪、戦争犯罪、人道に対する罪は国際犯罪であり、こうした犯罪を犯す者は何人たりとも責任があり、よって処罰を免れないこと」等を「遺産」として「維持し広めること」を「使命」として活動している。約言すれば、21 世紀の

今、国際刑事裁判の発展により、東京裁判に対する評価は国際社会で高まっている。しかも、日本は国際刑事裁判において守護者の役割を果たしている。そして、すでにドイツでは「勝者の裁き」という評価を乗り越え、「国際ニュルンベルク原則アカデミー」が設立されている。もし、日本でも歴史認識の対立を克服し、同様な組織が東京に設立されれば、国際刑事裁判の守護者という日本の立場がニュルンベルク裁判と東京裁判の遺産の継承に根ざしているという「力強いメッセージ」を内外に発信できるのだ。

２．市ケ谷記念館とその現状

市ヶ谷記念館とは、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地「1 号館」の一部を、防衛庁舎（現、防衛省舎）建設に伴い、移設復原した建物（1998 年、完成）である。また、この「市ヶ谷記念館」の元である「1 号館」は、戦前は、陸軍士官学校本部、大本営陸軍部等として使用。1946 年、極東国際軍事裁判所法廷（東京裁判法廷）が開設、その後は陸上自衛隊施設として使用された歴史をもつ。防衛庁（当時）は、その庁舎建設工事に当たりこの建物を全面撤去する方針であった。しかし、東京裁判法廷跡という歴史的重要性を唱える市民たちによる保存運動により、かろうじてその一部保存が実現したのである。現在、市ケ谷記念館は防衛省構内に所在し、同省に事前予約すれば、誰でも見学できる。しかし、その歴史的重要性と保存に至る経緯にもかかわらず、陸軍士官学校関連の展示が主であり、「東京裁判関連資料展示コーナー」は展示フロアの 16 分の 1 を占めるにすぎない。

３．市ケ谷記念館の展示改善を求めて

2016 年、「防衛省・市ケ谷記念館を考える会」は、東京裁判開廷 70 周年を期し、市ケ谷記念館の展示改善を求めて発足。以来今日まで具体的な改善要求を防衛省に提出してきた。その結果、2020 年、当会提供の東京裁判関連写真データ（米国公文書館所蔵）の一部が同館に展示されるに至ったが、依然として根本的な課題は解決されていない。今日まで当会は防衛省と二回にわたる交渉を実施したが、その席上で担当事務官は、「市ケ谷記念館における展示の主眼は＜東京裁判＞ではなく、＜1 号館＞の歴史である。したがって、＜東京裁判＞に特化することはできない」と繰り返し主張している。すなわち、この防衛省の姿勢が転換されない限り、若干の展示資料の増加があったとしても「東京裁判」史跡としての活用を目指す本会の根本的要求を実現することは難しいであろう。では、いかにしてこの姿勢を転換せたらよいのか。コーエンと戸谷の「国際ニュルンベルク・東京原則アカデミー」設立の提言は、私たちに重要な方向を示しているように思える。

「防衛省・市ケ谷記念館を考える会」公式サイト https://ichigayamemorial.jimdofree.com/

★発表者　　**黒井秋夫**「ＰＴＳＤの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」代表

「東大和戦災変電所を保存する会」会員

★表題　**「PTSD の日本兵と家族の交流館」がめざすこと**

★報告要旨

ＰＴＳＤは「心的外傷後ストレス障害」と和訳され、災害や戦争など強い心的外傷を受けた後に発症する精神障害を言う。アメリカでは出征兵士の研究や市民の運動がさかんだが、「日本兵のＰＴＳＤ」を課題に掲げる活動体が日本では「ＰＴＳＤの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」（以下「語り合う会」）が日本最初で唯一であり、資料館も「ＰＴＳＤの日本兵と家族の交流館・村山お茶飲み処・子ども図書室」（以下「交流館」）しかないという現実が語り継ぐ困難さを物語っている。

黒井秋夫の父、慶次郎（１９１２～１９８９）は 20 歳で徴兵され 34 歳で復員する間、中断を挟んで約 7 年間従軍した。父は戦争体験だけでなく一日中口を閉ざし、笑顔のない暗い人間でした。５人家族は貧乏だった。家族に降りかかる問題は、妻や長男に押し付け、無責任で私は「父のような男には絶対なるまい」と思い続け、尊敬の心もなく、情愛が通いあう親子関係もなかった。

２０１５年 12 月、黒井秋夫は乗船したピースボートでベトナム戦争の米軍帰還兵、アレン・ネルソンさんのＤＶＤを見た。「戦争体験でＰＴＳＤとなり昔の自分に戻れない」と話すアレンさんと父・慶次郎の暗い顔が重なり、父も戦争体験でＰＴＳＤを発症し、別人に変わり果てたのではないか！雷に打たれたような衝撃だった。それをきっかけに従軍した父親を語る会を船内で３回開いた。

参加したある女性の父は特攻隊だった。出撃予定の数日前に終戦を迎え兵役を解かれた。彼は普段はいい人なのに、何かスイッチが入ると妻（話し手の母）に暴力を振るった。90 歳を越えて認知症を発症し、病床で戦友の名を呼び「〇〇よー、俺は卑怯者だ。許してくれえ！」と元の兵士に戻り、叫びながら亡くなったと言う。

私はそれまで、先の戦争でＰＴＳＤの日本兵が存在したことを全く知らなかった。しかし、こうした経験からＰＴＳＤの日本兵の存在を確信し、このことを多くの人たちに知らせたいと思い、ピースボート下船の２年後、２０１８年１月 17 日に「語り合う会」を立ち上げ、更に２年後の２０２０年５月 10 日に「交流館」を開館した。

「交流館」は①ＰＴＳＤの復員日本兵と家族」の声、情報を発信する。②「ＰＴＳＤの日本兵と家族」の心の傷が癒される交流を続ける。③子供たち地域の人たちが集い笑顔溢れる交流を作る。④日本から中国、朝鮮半島、アジア、世界に平和の虹の架け橋を渡す。の４項目の目標を掲げている。

■３００万人前後の日本兵がＰＴＳＤを発症した

ベトナム戦争やイラン・イラク戦争の米兵の 25%前後がＰＴＳＤを発症したというデータがあり、米国ではＰＴＳＤ兵士たちの治療や社会復帰の各種施設がある。アジア太平洋戦争では８５０万人の日本兵が帰還した。米国帰還兵のＰＴＳＤ発症率に換算すると３００万人前後の日本兵が発症したことになる。しかし、日本の国も軍も、その後の自衛隊も日本兵が帰還後にＰＴＳＤを発症したか否かの追跡調査は全くしていない。

戦争神経症の専門病院として国府台陸軍病院が 1936 年に作られたが、戦争中はその存在も、研究治療をしていたことも社会に隠した。そのうえ、国府台陸軍病院最後の病院長諏訪敬三郎氏は部下に自分の論文以外の国府台陸軍病院のことは「50 年間は一切沈黙するように」とかん口令を敷いた。日本

の国も軍・自衛隊も帰還後の日本兵については何ひとつ調査しておらず、今も隠し続けている状態である。

★「語り合う会」は日本政府へ「PTSD 兵士と家族の実態調査」を直ちに実施するよう要望します。

２０２０年 12 月 11 日放送のＮＨＫ「おはよう日本」でＰＴＳＤの父親を持つ野崎重郎さん（当時 80 歳）は「父親のことは他人に知られたくなく友だちも作らなかった。話せなかった。恥だった」と話していた。しかし、「語り合う会を知り殻が破れた、言葉に出せるようになった。社会に家族も苦しんだことを伝えたい」と証言している。

PTSD 兵士の被害者家族は黒井秋夫と同様に父（夫）の行為の原因が戦争にあるとは思いもしなかった。一方、帰還した日本兵のＰＴＳＤ発症を予測できた人たちがいたことは確実である。

ベトナム戦争で従軍した米兵のＰＴＳＤがアメリカの社会問題となった当時の厚生省や自衛隊、国府台陸軍病院の元医師たちは米兵同様に日本兵も１００万人単位でＰＴＳＤを発症したと類推していたはずである。しかし、国は何らの調査もしなかった。無責任な不作為と言うしかない。

1970 年頃なら帰還兵の多くはまだ生きていた。厚生省がただちに帰還兵の健康調査（ＰＴＳＤを発症していないか）をしていたら、その発症状態や被害に苦しむ家族たちの実態もわかったはずだ。米国同様のケア政策を実施していれば症状が軽くでき、社会復帰できたかもしれない。

帰還兵のほとんどは既に生きていない。帰還兵と共に暮らした家族なら帰還後の兵士の状態を調査すれば答えることが今ならまだできる。しかし、該当者は高齢であり、彼らとて時間的猶予は少ない。

★「語り合う会」は下記のように「PTSD 兵士と家族の実態調査を直ちにして欲しい」という要望を掲げています。＊政府への要請五項目は以下の通りです。

★日本政府（厚生労働省・防衛省）に要請いたします！

★PTSD 兵士と家族の実態調査を直ちにして欲しい。

①復員した PTSD の兵士の人数。

②その症状。

③家族はどう対処したのか。

④家族はどのような援助を求めているのか。

⑤国府台陸軍病院の研究成果を PTSD の兵士の家族のトラウマからの解放と連鎖を断つケアに役立てて欲しい。

■子どもたちへ語り継いで平和な社会をめざしたい

開館から 1 年が経過し 2021 年 9 月 2 日までにコロナ禍でも 1180 人が来館した。小・中学生が多い時は 10 人を越えて来館する。子どもたちは DVD や展示物の感想を「戦争は怖いね」などと感想ノートに綴っていく。10 年後、20 年後に青年に成長した子どもたちが語りつぐ主体になる希望を感じている。戦争の真実を語り継ぐ対象は私のような高齢者世代ではなく、子どもたちであると確信している。

2020 年は「語り合う会・交流館」が全国 37 の報道機関から報道され、2021 年は NHK「目撃！にっぽん・クローズアップ現代＋」文化放送ラジオなどで報道され社会の注目と関心が広がっている。「語り合う会」と「交流館」の活動が多くの人に知られることが「日本が二度と戦争をしない。誰もが安心して暮らせる平和な社会」に繋がると信じて活動を続けていきたい。

★ホームページ https://www.ptsd-nihonhei.com

【分科会報告についてのコメント】
分科会報告について司会のお二人からコメントをいただきました。（当日のビデオをから事務局で加筆修正しました。）
左：岩脇さん、右：出原さん

【第一分科会】

（鮎澤さん）

1-1 鮎澤譲報告…鮎澤さんから何度も提起されているのは、戦争遺跡の調査や案内に、朝鮮人労働者の視点を加えていくこと、これは大事な点だと思います。朝鮮人労働者に限らず中国人労働者の視点を加えること、また日本の植民地支配そのものがアジアに多大な迷惑をかけてきたことそれを検証するために戦争遺跡を活用していきたい、そんな思いを強く持ちました。

1-2 中田均報告…中田さんのレポートは、湘南の戦争遺跡についてですが、これも軍の中枢の戦争遺跡であって、その規模から言っても構築のイメージから言っても日本の戦争遺跡の典型になると思います。だから各地の本土戦陣地を調査する上で、湘南を基準にするということはとても大事なことではないでしょうか。気になったのは陣地の名前を、発見者の名前を付けて呼んでいたが、考古学のように所在地の地名や小字で呼ぶほうが科学的になると思いました。

（中田さん）

（西尾さん）

1-3 西尾良一報告…西尾さんの報告は、大事な戦争遺跡の保存についての報告でしたが、最近は、首里（沖縄守備軍司令部壕）や広島（旧陸軍被服支廠）のように、大規模な戦争遺跡の保存が話題になっています。こうした戦争遺跡の保存や史跡指定を目指して取り組んでいきたいものです。全国のみなさんのご協力もお願いします。

【第二分科会】

（工藤さん）

2-1 工藤洋三報告…工藤さんからは海軍のレーダー開発について主にお話しいただきました。米軍資料を駆使されて研究成果を発表していただいたと思います。戦争末期、平塚にレーダーを集めて実験をしており、その中にはドイツのウルツブルグ（日本名では浜 61 号）も置かれていました。私たちの先入観として、日本は陸海軍ともにレ

ーダーを重要視していないというような認識もありましたが、戦争末期にはかなりのレベルに達していたということ、しかしそれを組織的に運用する部隊が不足していたということもわかりました。

2-2 高谷和生報告…高谷さんからは遥拝、宮城遥拝の遺構について発表いただきました。全国シンポの中で遥拝遺構が取り上げられるのは初めてではないかと思います。具体的に、熊本・福岡などに残っている史料、図面、写真などを用いて説明していただきました。日本兵の精神的な支柱となった遺構として位置づけられるものだと思いました。同時に熊本県下での戦争遺物の展示について紹介され、展示方法についての疑問や課題についても触れていただきました。

（高谷さん）

（平川さん）

2-3 平川豊志報告…平川さんは、里山辺地下壕について、ご専門の地質構造の点から分析されて、この地下工場が断層の中に造られていること、地質を十分に調査しないままに壕が掘られたという背景があるのかも知れません。また最近の大雨によって壕の入り口の上部が崩れたために修復が必要になったこと、壕内の状態を調べて再度地質構造の見直しをおこなったことなどが報告されました。

【第三分科会】

（春日さん）

3-1 春日恒男報告…春日さんからは、国際刑事裁判の発展の中で、国際社会ではニュルンベルクと並んで東京裁判の歴史的意義についての評価が高まっていることが紹介され、そうした見方ができることを知りました。現在は陸軍士官学校関連の展示がほとんどになっている防衛省「市ヶ谷記念館」を「東京裁判」の史跡と位置づけ活用を求める会の取り組みが紹介されました。

3-2 黒井秋夫報告…黒井さんから報告いただいた PTSD については、最近みんなが知ってきた問題です。アメリカでは以前から研究や市民運動が盛んでしたが、日本兵の PTSD については国による調査もなく、その家族の苦しみもについても実態を学ぶ場すらなかったのですが、黒井さんの活動によってそうした場ができたことはとても大きなことですので、これから私たちも大いに学んでいきたいと思います。

（黒井さん）

第 24 回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会

アピール「戦争遺跡を活用し平和の思いを伝えよう～戦争被害者・加害者にならないために～」

2021 年 10 月 2・3 日、東京都東大和市を発信地として、延べ 200 名が参加して第 24 回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会が開かれました。当初 2020 年夏に計画された東大和大会は、コロナ禍にあって 1 年間の延期を余儀なくされ、さらに感染の拡大が続く中でオンラインでの開催を余儀なくされました。こうした厳しい条件下にあって、シンポジウム開催にご尽力いただいたみなさま、また東大和市・東大和市教育委員会さまをはじめご後援をいただいたみなさまに対し、心より感謝申しあげます。

東京の西部に広がる田園地帯だった多摩地方は、陸軍飛行第五大隊が立川に移転し立川飛行場が開設された 1922（大正 11）年以降、多摩飛行場、調布飛行場をはじめとする陸軍関連施設の移転が相次ぎ、さらに立川飛行機・中島飛行機武蔵製作所・昭和飛行機東京製作所・日立航空機立川発動機製作所の航空機工場を中心とした軍需工場がこの地域に進出したことで 1940（昭和 15）年前後にかけて急速に発展しました。多摩地方は、アジア太平洋戦争遂行のためのバックヤードとしての役割を負わされたのです。戦争末期にはこうした軍施設、軍需工場を標的にした米軍機の空襲がおこなわれ、多くの犠牲をうみました。戦争の傷跡が各地に残る多摩地方では、八王子市の浅川地下壕、調布飛行場掩体壕（府中市、三鷹市）、武蔵野の空襲などを調査し保存する取り組みが進められてきました。なかでも東大和市の「旧日立航空機立川発動機製作所（立川工場）」に残された「戦災変電所」は、米軍機の銃撃痕を鮮明に残す重要な戦争遺跡です。この遺構は市民の熱心な保存運動が実を結び、工場跡地に造られた都立公園内に保存されました。1995 年に東大和市の指定文化財となり、修復・補強工事がおこなわれて保存のための努力が重ねられています。この補強工事では「平和への熱い思いの共有」を返礼品とする、ユニークな「ふるさと納税」が財源にあてられました。敗戦から 76 年が経過し戦争体験者が急減するなかで、「社会が共有すべき歴史の証言者」として戦争遺跡が果たす役割はますます大きくなっています。戦災変電所を「国民の財産」として位置づけ、未来に継承しようという東大和市の取り組みは戦争遺跡保存の意義を体現したものであり、市の積極的な姿勢に敬意を表するものです。

史跡・文化財として指定・登録された戦争遺跡は、2021 年 8 月現在 319 件が確認され、マスメディアも戦争遺跡に注目し大きく取り上げています。全国シンポジウムが初めて開催された 1997 年の数件から、四半世紀を過ぎて戦争遺跡保存の意義が広く国民に認められてきた結果といえます。

一方で戦争遺跡保存をめぐっては、多くの憂慮すべき事態が進行しています。文化庁の『近代遺跡調査報告書⑨（政治・軍事）』は、沖縄戦をめぐる記述を口実にした政府の圧力を受け予定から 15 年以上も経過しながら刊行されていません。私たちは文化庁に対し、政治的な圧力を排し、客観的、科学的な内容に基づく報告書を一日も早く刊行することを求めます。この間、沖縄県に続いて福岡県でも戦争遺跡の悉皆調査がおこなわれ報告書が刊行されました。地方自治体にあってはこうした優れた実践にならって、文化庁の後ろ向きの姿勢に便乗することなく独自の調査や史跡・文化財指定を進めるよう求めます。

戦争遺跡の保存・活用のあり方をめぐっては旧日本軍の顕彰を目的とするような「軍事博物館」的な資料館、加害の側面を覆い隠し戦争の一面のみを切り取って美化する手法などの例が数多くあげられます。このことは、世界文化遺産に登録された長崎県端島炭鉱における朝鮮人労働者についての説明の欠如、教科書から「従軍慰安婦」の「従軍」を削除することを求めた閣議決定、韓国での「徴用工裁判」への対応など、日本政府の歴史問題に対する不誠実な姿勢と通ずるものです。世界的には、侵略や植民地支配の責任を数百年前に遡って追及することも行われています。今求められているのは、日本がおこなった戦争の加害と侵略の歴史に真摯に向き合うことではないでしょうか。

この 2 年間に戦争遺跡の改変、消滅の危機は一層増しています。全国ネットワークでは、広島市旧陸軍被服支廠倉庫、広島市サッカースタジアム建設予定地の旧陸軍の被爆遺構、島根県出雲市旧大社基地、沖縄県那覇市首里城地下の沖縄守備軍司令部豪の保存などについて、要請や署名活動に取り組んできました。まさに戦争遺跡保存の課題はまったなしの状況です。憲法と平和の危機が現実のものになりつつあるいま、戦争遺跡を保存・活用し次世代に継承していくことは、戦争に反対し平和な世界の実現に向けて奮闘するすべての人々とつながる営みであると確信し、私たちの運動をさらに前進させることを誓って大会アピールとします。

2021 年 10 月 3 日　第 24 回戦争遺跡保存全国シンポジウム　東京東大和大会